

突撃！リスクマネージャー！！

医療の安全に取り組む全国のリスクマネージャー様にインタビュー！

No.34 大阪鉄道病院 医療安全管理室 医療安全管理者兼看護副部長 岡田みどり様

■ 病院概要

- 大正 4 年 4 月 : 神戸市に神戸鉄道病院として開設
- 昭和 3 年 5 月 : 神戸鉄道病院を大阪鉄道病院と改称
- 昭和 57 年 7 月 : 各種健康保険取扱医療機関として一般診療開始
- 平成 20 年 11 月 : 回復期リハビリテーション病棟開設
- 平成 21 年 10 月 : 化学療法センター開設

地域の中核病院として発展を遂げ、19 診療科において急性期医療と回復期医療を提供している。平成 21 年 10 月に「化学療法センター」を開設するとともに、23 年 4 月には「大阪府がん診療拠点病院」の指定を受け、専門的ながん診療機能の充実を図るなど、「安全で信頼される質の高い医療」の提供に努め、近隣の医療機関と連携を密に図りながら、すこやかな地域づくりに貢献したいと考えている。



■ 病院の理念

“私達は人間性を尊重し、謙虚で誠実な医療を提供します”

■ 基本方針

1. 安全を積み重ね、患者さんから信頼される医療に努めます。
2. 地域中核病院としての役割を認識し、住民の皆さんの健康増進に努めます。
3. 地域医療機関との連携を重視し、きめ細かな医療に努めます。
4. 専門性を追求し、医療レベルの向上と人材の育成に努めます。
5. 急性期医療から回復期医療まで、良質な医療の提供に努めます。

■ 看護部理念

“私達は、温かいところで、信頼される看護を提供します”

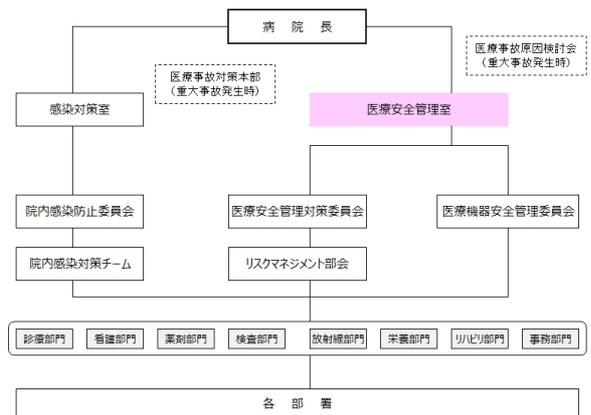


医療安全管理者兼副看護部長
岡田 みどり様

—医療安全管理について、どのような体制・組織をとっていますか。

「医療安全管理室」の下部組織として「医療安全管理対策委員会」「医療機器安全管理委員会」「褥そう対策委員会」などそれぞれ安全管理に関わる委員会があります。さらに、「医療安全管理対策委員会」の下部組織に「リスクマネジメント部会」があり、各部署にリスクマネージャーを配置しています。

ヒヤリ・ハットが各部署のリスクマネージャーを通して医療安全管理室に報告され、それが重大事故の場合は「医療事故原因検討会」を開きます。「医療安全管理対策委員会」は月に 1 度開催され、各部署からの報告を分析、今後の対策を検討します。



各会の構成は次の通りです。

■ 「医療安全管理室」

病院長・医療安全管理者(専従)・リスクマネジメント部会長(医師)・医薬品安全管理者(薬剤師)・事務担当医療安全管理者

■ 「医療安全対策委員会」

病院長・副院長・診療部長・医務部長・医療情報部長・看護部長・薬剤部長・事務部長・企画課長・総務課長・医療安全管理者・医薬品安全管理者

■ 「リスクマネジメント部会」

呼吸器外科部長・看護部長・薬剤部長・事務部長・内科系医師・外科系医師・外来看護師長・病棟看護師長・手術室看護師長・放射線技師・臨床検査技師・臨床工学士・リハビリテーション技士・栄養士・医薬品安全管理者・医療安全管理者

—医療安全管理者の役割と具体的な活動内容を教えてください。

医療安全体制の構築、委員会・部会の運営、教育・研修の計画と実施、情報収集、分析、対策立案、フィードバック、評価、医療事故が起きた場合の対応などが挙げられます。事故自体は大きくなくても患者様のご要望が強い場合は、現場に赴き対応もします。転倒・転落については看護部が主体となって事故防止ができるように、人材育成や現場支援に力を入れています。

□ 転倒・転落事故防止について

—アセスメントはどのタイミングでとり、また、どのような点を重視されているのでしょうか。

当院では、入院・ADL 変化・転倒発生時にアセスメントを行っています。アセスメントスコアシートは平成 15 年度より病院全体で使用を開始し、平成 18・20・21・23 年度に見直しを行ってきました。当初は診療科に合わせた多くの項目(ギブスを付けている、第一歩行時の危険性など)を設けていましたが、効果が無い事が分かったので改定ごとにシンプルな内容になりつつあります。昨年度の改定では、危険度に大きく影響を与える対象者の『活動状況』『認識力』を 2 項目に分け点数を高めることにより、転倒・転落の危険度の高い方をより適正に判断できるようになりました。『活動状況』は「身体能力」と「活動の障害となる要因」のスコア、『認識力』は「認知能力」と「行動欲求」のスコアに分けています。尚、アセスメントスコアシートは万能ではなく、患者様の転倒リスクを表す 1 つのツールであるという認識が大切だと思います。入院当初は認識力に問題はないと思っていた患者様が観察しているとそうではなかったり、術後にせん妄状態になったり、アセスメント結果でリスクが低い患者様でも転倒することがあります。よって、顕在化しない情報やリスクを感じ取り事故を防止するためには、KYT(危険予知トレーニング)などを活用してスタッフのリスク感性を向上させる事が重要だと考えます。

—対策や看護計画にはアセスメントの結果をどのように生かされているのでしょうか。

平成 15 年度よりアセスメント結果を危険度Ⅰ～Ⅲの 3 段階に分類し、危険度に合わせた①観察項目②環境③指導・教育の項目から成る「転倒事故防止のための予防策シート」を作成しています。これが最初の看護計画となります。例えば、危険度Ⅲで転倒リスクが非常に高い方に対しては、離床センサーの適用を積極的に検討します。この「転倒事故防止のための予防策シート」をカルテにはさみ、携わるスタッフ全員で情報共有・対策実施ができるようにしています。そして、対応したスタッフが危険度に疑問を感じたり、対策が合っていない等と感じた場合はチームカンファレンスを行い、対策を追加したり変更したりしています。

—近年の事例発生件数はどの様に推移していますか。また、それに対しどのような取り組みをされていますか。

平成 20 年度に回復期リハビリテーション病棟を開設したことにより、平成 21 年度、22 年度の転倒事故件数がかなり増えました。回復期リハビリテーション病棟の患者様は、特に転倒リスクが高い方の割合が多い事が要因に挙げられますが、年間入院患者数に対する転倒率が 0.3～0.4%と高い状態が続いていました。そこで平成 23 年度は、看護部全体で年間を通して転倒・転落事故防止に取り組みました。「転倒事故防止のための予防策シート」をしっかり活用する、ラウンドを増やす、病棟リスクマネージャーが積極的に声をかける、KYT を取り入れリスク感性を高めるなどの取り組みの結果、平成 22 年度と比較して平成 23 年度は、転倒事故件数を 30%減らすことができました。

—離床センサーの導入目的と経緯、機種選定のポイントについてお聞かせ下さい。

(大阪鉄道病院様の導入:320 床に対し、計 47 台(病床数に対する導入率 14.7%)

主な機種:コールマット・コードレス 16 台 タッチコール・コードレス 16 台 赤外線コール 8 台 座コール・ポケット 6 台)

身体拘束をしないで転倒・転落事故を事前に予防することをポイントにしています。昨年度の大量導入の成功は、院内業務研究発表会での報告が大きかったと思います。1 年間転倒・転落事故防止に取り組んだ結果、事故件数が減少したことを発表しました。その中で本来の目的・使用方法とは違う形でセンサーを使用していること(床敷きのセンサーをベッド柵に掛けて設置など)も報告しました。それを知った事務部長が看護部スタッフの取り組みを評価、また、台数不足と規定以外での使用は故障の原因になり得ることを懸念され、年間 3～4 台だった導入台数が一括大量購入に繋がりました。従来、当院では床敷きのケーブルタイプを使用していたのですが、ケーブルが転倒のリスクに繋がる可能性があるためコードレスを選択し、機種選定は各部署より要望をまとめ現場の声を反映させました。

なお、この導入により 1 日病床稼働平均 243 床に対し、転倒予防用具数(ほとんどが離床センサー)が 135 台となり、2 人に 1 台以上の割合で離床センサーを使用できるような状況が整いました。

これをいかに有効活用し、転倒・転落事故を防止するかが、今後の課題だと思います。

—離床センサー運用上の課題や工夫、管理方法がありましたら教えてください。

どのセンサーが適合するか分からない入院初期の患者様には、複数のセンサーを設置し、判断しています。例えば、起き上がろうとして柵を握ると報知する「タッチコール」と床敷きセンサーを組み合わせるなどです。現在、設置・運用の判断は病棟に任せていますが、今後は標準化された基準ができればと思っています。

また、「タッチコール」については専用袋を作って、構成品を失くさないように保管できる工夫をしています。

コードレスならではの課題として、センサーと無線中継ボックスの組み合わせが変わってしまう事が心配だったので、ペアとなるセンサーと無線中継ボックスは、同じ管理ナンバーのシールを貼って、識別ができるようにしています。



—メーカーに望まれること(離床センサー運用上の課題や情報提供など)は何でしょうか。

使用方法に関するレクチャーや資料があれば助かります。先日も導入したばかりのセンサーが使えず、すぐに対応していただき解決しましたが、コードレスセンサーと無線中継ボックスが正しく組み合わさっていなかったことが原因でした。今後は看護師、清掃スタッフ、ヘルパーに使用・管理方法の周知徹底ができるよう、説明会を開催してほしいですね。

—テクノスジャパンでは使用や管理、メンテナンスに関する「離床センサーワークショップ」を行っていますので、近いうちにぜひ開催させてください！

テクノス通信 vol.36(2012年5月発行)より